

横浜の資料館像

遠山茂樹（横浜市立大学文学部教授）

一 資料館設立の趨勢

この十年間の資（史）料館・文書館設立の動きはめざましい。国立公文書館が開かれたのが一九七一年、これよりさき五九年には山口県文書館が開設され、六二年京都府立総合資料館、六八年東京都公文書館、その翌年には埼玉県立文書館と相つき、都道府県ではその大部分がもつようになった。市町村レベルでも、計画中のものをふくめれば相当の数にのぼるだろう。

敗戦直後の経済事情と歴史への関心の喪失によって、歴史的に貴重な文書や記録が大量に失われたが、散逸する史料の九牛の一毛を救うため文部省史料館が一九五一年に設けられ、江戸

時代史料の購入保存にあたった。しかし何といっても、資料館設立の機運をうながしたのは、学会議の「公文書散逸防止に関する建議」（五九年）^原、および「歴史資料保存法の制定についての勧告」（六九年）が出たこと、この決議の実現にむかって歴史研究者を中心とする全国的な運動がおこったことであった。この時期が資料散逸の第二のピークであった。経済の高度成長期をむかえ、社会の変貌、行政の改変がいちじるしく、その渦中で、江戸時代の史料だけではなく、近現代の史料、とくに公文書の散逸・廃棄が目立っていた。

学会議の勧告にいう歴史資料保存法とは、民間の歴史的資料の調査と受託・購入、一定年

一 資料館設立の趨勢

二 市民の歴史への関心

① 最近の傾向

② 「ふる里」を求める気持

三 横浜資料館像

① 資料蒐集・保管のあり方

② 資料館への期待

限を超過した公文書・公記録の移管と整理・保存を目的とする地方文書館の設立を国および地方自治体に義務づけようとするものである。この勧告とそれを支持した全国的な運動のなかで明らかにされた二つの重要な原則がある。第一は、資料を本来の所有者・所有機関が所在する現地で保存すべきだという現地保存主義である。第二は、保存される資料は、研究者だけではなく、ひろく国民に公開されなければならないという公開主義である。

第一の原則は、言葉をかえれば、地方にある資料を東京に集中する方式では、史料の散逸を防止する目的はたせないとこの考慮から出ただけではない。史料の内容を調べ、それを分類

整理し、正確で利用しやすい目録を編さんする

には、現地を知悉する現地の専門家の努力を願わなければならないからである。それだけでは資料を利用する人も、まず現地の住民であるうし、そうあってほしいのである。住民が地域の歴史にたいしてもつ関心が高まってこそ、資料の保存が期せられるからである。

第二の公開の原則は、歴史の研究が、学術会議の有権者や学会の会員に登録されている研究者にかぎらず、広い意味の研究者層によって、現におこなわれているという、戦後の学界状況を顧慮しているのである。研究という内容さえ、ずっと広がっている。それは趣味・娯楽から出ている歴史の興味、日常生活の個別の利害から来る歴史への関心など動機は千差万別であるにせよ、そうした歴史への国民的な関心を麓野にしながら、その中から職業的研究者以外の人々によって貴重な資料の発掘や重要な史実の発見がなされている。だとすれば蒐集・保存された資料は、原則として、職業的研究者のみならず、ひろく国民に利用の途を開かねばならない。文書館が地方大学附置としてではなく、公立の施設と勧告に規定されたのも、こうした理由からである。

文書館ないし資料館の設立の経過が私たちにあたえてくれる教訓は大きい。それは地方文書

館・地方資料館がその主流だという点である。

しかも都道府県立と市町村立とが並存し、両者が協力しあうことで目的が達せられるという点が明らかにされていることである。実際国立公文書館設立の勧告は、地方文書館設立勧告より約十年早かった。それにもかかわらず政府が重い腰をあげたのは、府県立のそれがすでに開設され、次々とその準備がすすめられるという情勢につきあげられたからである。政府のもつ公文書の歴史的価値は、全国史の観点からすれば高いし、内閣文庫をはじめ各省附属の史料保存施設をもっていた。政府予算からすれば公文書館設立の費用は高が知れている。それなのに政府が冷淡であったのはなぜか。対象の資料の量の膨大さもある。官庁間のセクシヨナリズムの故でもある。だが何よりの理由は、資料の保存と公開とを求める世論を生む基盤である「地域」をもたなかったからだというのが、この設立促進に関係した私の感じである。職業的研究者の要望をまとめることは、資料の重要さからいって容易である。しかし研究者の利用の便宜をはかれないだけでは、政府の重い腰を押しあげて力には不足である。一般国民の声を引き出す手掛りがかめない、これが府県市立の文書館であれば、地域の要求としてまとめあげるのには、はるかに容易であろうのに、とその時私は

痛感した。

過去と私たちとをむすびつける基盤としての地域、国もそうした地域の一つであることはいうまでもない。「日本には政府ありて国民（ネーション）なし」とは、百年前の福沢諭吉の言であるが、その病弊の根源である中央偏重の社会体質が戦後三〇年だけだけ改まったかは疑わしい。それにしても文書館・資料館問題の経緯は、住民の生活と連帯の基盤たる地域は下から形成するほかはないという原則をはしくも明らかにしている。それは史料の保存という便宜から来るだけではない。国民の歴史意識―政治意識の母胎ともいふべき―は居住地域を媒介にして生れ育つものだからである。

二——市民の歴史への関心

①——最近の傾向

国民の歴史への関心がひろがっているのは、ここ二〇年間の傾向である。人間の本性ともいふべき回顧趣味に由来するとも、テレビドラマの影響だともいわれる。そのかぎりでは何のこともない。しかし一〇年ほど前からの新しい傾向は、地域史・地方史への関心が高まったことである。都道府県ごとの歴史を系統的に説いた叢書がかなりの読者を集めている。東京では各

区の歴史が「東京ふる里文庫」と銘うって刊行されている。全国を見渡して、市や町や村の歴史が商業出版のベースに乗って続々と出ている。昨今の有様は、かつてなかった現象である。地方自治体の手による府県史・市町村史の編さん・刊行がこうした機運を支えているのだが、それにしても、これほどまでに高まった地域史への関心がなぜ国民の間に生れたのか、私も十分には理解できない。

六〇年代後半以来の地域の変貌、生活様式の激変が、かつての姿を今にして記録にとどめておかなければという思いを地域住民にいだかせそれが多くの人の共感をよんだという点は、誰しも気のつくところである。しかし問題は、その反響が、古くからの居住者や中年以上の年輩者だけではなく、若い人々にもおよんでいることである。若い人のレジャーの手段としての旅行熱、その一つとしての名所旧跡めぐりのガイドブックの意味にすぎないと片づけてすむのかもしれない。だがそれにしてもしも疑問は禁じえない。大都市の市民の地域史への関心を考える場合、その疑問は一層切実となる。

大都市の住民の大多数は、他の府県の出身者である。横浜市の年間人口流動率は一九・三パーセントで、百万人以上の指定都市のなかで最高の数値をしめし、「流民化した都市市民」と

表現されている（鳴海正泰「現代都市と住民」『ジュリスト』増刊「現代都市と自治」所収）。そして一戸建持家の居住者以外の市民は地域や市政への関心がうすいとアンケート調査の結果から結論づけられている（都市科学研究室編『生活環境についての意識調査』一九七三年）。たしかにこれらの指摘は、事実の主要な側面をついている。住民の多くが横浜を居住地にえらんだ理由は、勤めや仕事の関係、またはたまたま手ごろの住い場所があったからという以上を出ないだろう。相当数の方は、早晚横浜を出るだろう、あるいは出たいと思っているだろう。それはあたりまえである。だからといって、その面だけで市民の地域意識をとらえては不十分である。すくなくとも市民の地域史への関心を説明することはできない。

前記した東京の区の歴史の叢書が「東京ふる里文庫」と銘うち、編集が「東京にふる里をつくる会」だというのは、今解こうとする課題にとって象徴的である。この会については、各区に自主的にできてきている歴史サークルの連合体であるとかわかってはいるだけで、どれだけの実体をもちのか、どういう歴史意識で会員が結ばれているのか、私は知らない。それにしても、東京を「ふる里」だとする人の会ではなく、「ふる里をつくる会」なのである。裏がえせば、東京

に「ふる里」をもたず、さりとて出身地に「ふる里」を感じることで満足せず、新しく東京の居住区に「ふる里」を作ろうという運動なのである。出身地に「ふる里」を感じることがうすれているのは必然である。どの市町村でも、街のたたずまいや生活の特色が失われ、全国画一化、いわばミニ東京化している。何も出身地に「ふる里」を固定視する必要はない。東京でもどこでも、現に住むところに「ふる里」を感じてもおかしくはない。新たに作ろうとする「ふる里」は、もともとの意味の「故郷」という概念とはちがうだろうし、終の栖と観念する定住地にかぎるわけでもなからう。あるいはまた居住地域に「ふる里」を感じるとともに、それから隔った職場がある地域にも「ふる里」を求めても差しつかえないだろう。

②「ふる里」を求める気持

それならばそういう意味あいでの「ふる里」を求め作ろうとする市民の心とは何であろうか。そうした心のあることをもつともだと感ずるのだが、それが何か、私にはしかとつかめない。常識の域を出ないが、次のように今のところ考えている。

「ふる里」を求める動きは、「ふる里」が失われつつある、「ふる里」をもてなくなってい

る状況を前提としている。地域から自然が失われ、生活環境が破壊され、人間と人間のむすびつきがうすれて、人工の砂漠化そうとする状況への抵抗に源流を發している。そしてマイホーム主義や政治不信の情緒がひろがって、地域への無関心の傾向が現象的には強まっていることも一面の事実であるが、他面では住民の自治意識がのびていることも、実体の反面であり、このことと、地域の歴史への関心とはつながっている。行政への不満と要求は、住民運動の形をとるにせよ、個人々の行動にとどまるにせよ、年を追って強まっているのが実体ではないだろうか。それにもかかわらず地域と市政への積極的な関心と行動とが弱くなっているといわれる所以は、今日の都市問題があまりにも複雑かつ全体的であり、しかも市民ひとりびとりにとって具体的問題が切実であるが故に、あまりにも個別に分れているという点にある。生活環境に不満な問題、市政に改善を求める問題をと問われれば、何から何までと答えたのが市民に共通する本音である。そのうちでとくに何を求めるかと問われれば、答は百人百様に分かれざるをえない。同程度の生活条件の人に質問しても、ある人は第一要求に学校や保育所の整備を求め、ある人は交通難の緩和を求めらるうし、他の人は騒音や大気汚れの解決を先決だと主

張するだろう。問題の核心は、こうした多種多様の個別具体の要求を関連づけ系統づける政治の力、思想の力が弱体化していることにあるのではないか。ありあまる要求をかかえながら、市側から呼びかけられる地方行政への「住民参加」に進み出る門口を見出しえないでとまどっているのではないか。横浜市の内情にうとい私の見方は見当はずれかもしれないが、そんな気がしてならない。

私が多少の経験を通じて知っているのは、歴史サークルに参加してくる人々の気持である。その人々は、昔への回顧趣味から出ているにせよ、集りの終わりの雑談は必ずといってよいほど、現在・現実の問題にたちかえってくる。市民の手になる歴史の学習は、少数者の同好会の域をこえて大衆的性格をもてばもつほど、ひろく政治・社会についての学習運動の性格をもつようになるのが一般だ、と私は考えている。歴史を見ることは、否応なく、社会の多側面を総合的にとらえ、社会をまとまりあるものと考え、個人を社会とのつながりで理解することとなる。歴史を知ろうとする心は、社会を再発見しようとする心につながっている。地域の歴史への関心が高まっているという昨今の世潮は、地域のまとまりを回復したい、地域と自分個人とのつながりを確めたいという気持のあらわれだ、

と私は理解したい。とくに地域の歴史―県の歴史、市の歴史、さらに住居や職場周辺の地区の歴史―を知りたいというのは、身近で具体的なものを手掛りに歴史を知ろうということであり与えられる歴史の知識だけに満足せず、自分の関心にもとずいて歴史を知ろう、自分の手で調べて歴史を明らかにしたいという歴史への主体的姿勢があることを示している。たんなる歴史ブームのあらわれではない積極的な要素、今日の大都市の生活づくりにとって、貴重な芽生えがそこにふくまれていたのではないだろうか。

こう考えることは、私の職業からくる歴史学習の効用についての過大評価があるのかもしれない。現在に関心がうすれているから、現在離れとして過去への愛着が生れるという面があることも否定はしない。その面が強いとしても、懐旧趣味が人間の自然の情である以上、そこから出發しなおしても良い、今日のところ地域の歴史への関心を大切に育ててゆくべきではないかというのが私の気持である。地域史への関心は、それが二百年前のことであれ、八〇年前のことであれ、地域の今日の問題への関心、市民の自治意識の成長の母胎となるにちがいないと考えている。

三——私の横浜資料館像

① 資料蒐集・保管のあり方

横浜の歴史資料館は、大都市、とくに首都圏の大都市としての横浜の特質を体現したものであってほしい。大都市がもつマイナスの条件もプラスに転化して、積極的な特徴としたい。都道府県レベルや中小都市の場合は、おおむね収蔵すべき中心の資料のまとまりがすでにあって、それが史料館の内容の特徴を規定してしまっている。横浜市の場合、関東震災と空襲の罹災によって、手持ちの資料が貧弱である。それが資料館の建設にとって痛手であることはいうまでもない。しかし考えようによっては、既存の資料群にしばられることなく、自由に、それだけ系統的に資料を集めることができる。それを長所としなければならない。原資料が豊富に残っている地域であれば、資料散逸防止の目的からして、原資料の蒐集・保管を勢い専らとせざるをえない。横浜でも相当量の原資料の所在は、今日までの調査でわかっていて、未調査のものもまだまだあるに相違ない。原資料の調査と、それを購入しまた寄託をうけて保管する仕事が大ききことはもとよりである。しかしそれとともに、横浜市以外で所蔵される横浜関係

の公私の資料を複製保管する仕事の量は、他の資料館・文書館に比べて、はるかに大きいだろう。そのための人力と費用がかかるのはやむをえない。しかしこの結果、他の館のように収蔵資料が、特定の時期や特定の問題に偏らない、バランスのとれた系統的な資料の集め方ができるし、整理や保管に便宜だという利点もある。

比較的自由に収蔵資料を構成できるのがプラスの条件だといった。それだけに資料館がどのような横浜の歴史像を市民に提供するかが、慎重に検討されなければならない問題である。開港資料館という看板が語るように、一八六〇・七〇年代の日本の開国と横浜の開港が重点とされるのは、当然である。しかし開国・開港の時期にせまく限定せず、開港以前の江戸時代の資料、また関東震災ごろまでの近代資料をもふくめようという、研究委員会議の中間報告書の見解に私が賛成したのは、以下のような見とおしからである。開港と文明開化は、都市横浜の成立をもたらし、全国史にたいしてもつ独自の存在意義をつくり出した点で重視されるのは、もちろんである。しかし現代横浜の問題につながる視点からすれば、それ以前の歴史も、それ以後の歴史も大切である。開港以前の漁村・農村の生活、街道筋の宿場町の機能は、新しくつくられた横浜の街の基盤であったし、その影響

は、今日の各地区の特色に作用している。また横浜の貿易が発展し、日本資本主義成立の動脈となり、たんに欧米文化流入の門戸というだけではなく、近代日本の玄関口となったのは、文明開化期が終わった一八九〇年代から二〇世紀初頭にかけてである。そして日本最大の貿易港たる地位が変わりはじめると、京浜工業地帯の都市という新しい性格がつけ加わり、他方で東京の隣接地としての住宅地帯としての発達が見込まれる、そうしたミナト横浜とちがった相貌をもちはじめるのは、一九一〇年代から二〇年代にかけて、すなわち第一次大戦から関東震災にかけての時期であった。いわば戦後横浜のもつ諸特徴の原型が、このころほぼできたといえよう。したがってこの時期までの横浜の推移を視野のうちにおさめなければ、現代につながる歴史的知識の提供とならないのである。

一九二〇年代までの資料を対象としようというのは、当面の第一段階として、最小限この範囲までを目標とするという意味である。すでにそのきざしを見せた横浜の性格の転換がはっきりその姿をあらわした、その後の半世紀の歴史の推移は、市民に提供すべき歴史像として、一層重要である。大恐慌期、一五年戦争期、空襲と敗戦、占領期、講和以後の戦後期、この時期の資料の散逸の危険は、それ以前の時期に勝る

とも劣らぬものがある。戦後期の公文書の整理と保管は、今から手をつけておかなければならない大事業である。第二の資料館の構想が一層むずかしいことは、眼に見えているだけに、早速にその準備にあたる必要がある。

② 資料館への期待

大都市の資料館が市民との関係に一段と配慮をばらう必要がある理由は前述した。資料を蒐集・整理し、目録をつくり、市民に閲覧の便を提供するという本務のほかに、展示や講演会・研究会、資料解説の講習会をひらくという、どの資料館でもやっている事業は、当然必要である。既設の資料館の経験によればこれだけで手一杯という仕事の量となる。その上で、横浜の特質から次のような活動をぜひ行ってほしい。

第一は、市内各地区の歴史サークルの連絡・助言の仕事である。資料館の業務状況と各サークルの運営状況を知らせる記事を入れたニュースを定期的に発行すること、館員と市民の研究発表の場としての紀要を出すことを求めたい。

第二は、来館する市民に閲覧させるという受身の態度にとどまらず、彼らの調査・研究の相談相手となって援助する積極的な機能をもつことである。区の歴史、地区の歴史、そうした身近かで具体的な問題を対象とすることが、今後

市民の要求として強まるであろうし、それこそが自治意識の成長にむすびつくことは前述した。ところがこのレベルの歴史となれば、既成の歴史書、研究者の既成の知識に頼ることはできなくなり、市民が自分で資料から調べるほかになくなる。そうなれば資料の所在や内容を知悉している館員の親身の援助を必要とすることとなる。これは館員にとって意外に重い負担となるにちがいない。しかし資料館設立の目的からして、どうしても実現したい仕事である。

第三は、小・中・高校の社会科教育と密接な関連をもち、その教材を提供することである。地域史・地方史・郷土史の学習の重要さについては、これまでも強調されてきたし、教材としての副読本もつくられてきた。だが私の見るところでは必ずしも効果をあげてはいない。その原因がどこにあるかを検討する紙幅がないので私の期待する地域学習の骨組を記すにとどめたい。地域学習は社会科学学習の総まとめの位置におく。歴史・地理・政治・経済の各分野の学習を関連させ総合させなければ、地域の理解はできないからである。そして現地に臨んでの観察と、資料にもとづく調査とをむすびつけた中学生なりの、高校生なりの演習（自然科学の実験にあたる）の役割をもたせたい。地域学習は、生徒に郷土にたいする愛情を育てるためにある

としばしばいわれる。しかし彼らの大部分は、社会に出て横浜を離れるのである。学習の目的はもっと大きなところにあると私は考える。こうした演習的な学習を経なければ、社会にたいする、また住民自治、すなわち民主主義にたいする主体的認識の基礎を培うことができないのではないであろうか。資料館は、この学習のための教材としての歴史資料を提供するとともに教員の研修の場として利用してもらいたい。

以上のような仕事を行うには、それに相応する施設・人員・予算を必要とする。本市百年の計のために、市当局に思いきった、またきめこまかな配慮を願いたい。それにしても創立期には、館員の熱意がとくに求められる。資料館・文書館の関係者で組織されている歴史資料保存利用機関連絡協議会は一九七六年発足したが、その創立大会での討論をもとにして青山孝慈氏は、文書館の最低にして最高の要件（使命）は、「資料の収集と整理に自己を埋没して悔いなき心情にある」と記しているが（『文書館問題について』『地方史研究』一四〇号）、そうした人材を確保することの重要さを強調したい。

（附記）私は研究会の座長の役にあるが、本稿は、会議の意見を参考にさせていただいたものの、あくまでも個人の見解として書いたものである。御諒解いただきたい。